

題 目 「対話」に基づく道德教育のあり方に関する研究—マルティン・ブーバーの
教育思想に依拠して—

本研究は、道德教育における「対話」について、マルティン・ブーバー（Martin Buber, 1878-1965）の人間観や教育思想を検討するとともに、今日までの、わが国の道德教育理念や実践との比較を通じ、教育実践者の立場から道德教育のあり方を論考したものである。その中で、「仮象」（Shein）に支配されがちな単なる“話し合い”ではなく、ブーバーの主張する「内面的行為の相互性」に基づく「対話」の営みを通じて、生徒同士がお互いの普遍的かつ固有の人格的価値に目覚め合うように促すことこそが、今日の道德教育における本質的、かつ喫緊の課題である、とした。

各章における論述内容を要約すると、以下のとおりである。

序章では、先ず、「対話」なき学校教育の現状と、それに対応すべき道德教育の歴史的経過および改善への取り組みの状況を振り返るとともに、本質的な課題としての問題提起を行った。次に、本研究の課題、方法、内容構成を述べたあと、先行研究の成果を概説した。

第1章では、生徒たちが日常生活において直面している課題を議論のテーマとして取り上げ、ブーバーの主張する「対話」的プロセスを踏むことにより、自他の「現状存在」に目覚め、一人ひとりがかけがえのない人格として「証される」よう働きかけることが大切であるとの認識を示し、授業の中で実践すべき基本的なあり方としての提案を行った。

第2章では、今日求められている道德教育とは、価値判断や行動の基準を教師が一方的に教えるのではなく、子ども自身が他者との相互作用の中で内側から自発的に獲得してゆくことを重視する教育であり、新たな問題状況に直面して他者と協同してよりよい問題解決を探るために必要な力を養うことを目標とする教育である、とした。

第3章では、ブーバーの人間の「間柄」に関する教育思想を取り上げ、その現代的意義を考察するとともに、学校における生徒相互の関わりの現状から、その改革の手立てとしての「協同学習」のもつ価値と、それを道德教育として活用する上での限界を考察するとともに、他者とは「間の領域」における関係性の深さや程度に応じてつながっており、良きにつけ悪しきにつけお互いに影響を及ぼし合っていることへの認識を促す学習材の工夫が求められる、との見解を示した。

第4章では、ブーバーの「対話」思想がいかなる時代的背景を有し、如何にして生じていったのかを検討するとともに、彼の「対話的人間観」の特性に関する考察を行った。その中で、彼が独自の理念を生み出すきっかけとなった現代の危機的状況を克服するためには、人間同士が「パートナー的」になることが唯一の手段であるとしている一方、現代社会にはそれを阻もうとする様々な要素が存在しており、その解決の方途として「真の対話」

という概念を提起していることを取り上げ、これからの道徳教育においても、こうした彼の思想が生かされ実践されることが大切である、との見解を示した。

第5章では、先ず第1節で、以前より、様々な改革が志向され、実践されてきたわが国の道徳教育、とりわけ「道徳の時間」の授業方法における代表的な事例を取り上げ、ブーバー思想の立場からの考察を行うとともに、従来の「学習指導要領」や道徳教育に関する研究者からの批判を検討し、わが国においては、道徳授業の改善を目ざして様々な工夫がなされてきたが、残念ながら十分な成果が得られていない根本的な要因は、はっきりとは捉えられない「人間の間柄」の領域に潜んでいる教育の課題が蔑ろにされていることであり、他者の生き生きとした感情を相手の側から体験することにより、人間としてのあり方をお互いに学び合っていく道徳教育こそが目指されるべきである、とした。

続く第2節では、ブーバーが自らの教育思想を生み出した背景となる、当時の教育制度を検討するとともに、彼が性格教育と他の教育活動の違いをどのように捉えていたのか、また性格教育はどのように実践されるべきであると考えていたのかを、彼のいくつかの教育論の中から具体的な記述を取り上げながら検討し、われわれ人間は、相互的な実存関係によって存在しているにも拘わらず、実際の人間関係においては、とにかくこの最も大切な人間性への気づきが疎かにされがちであること。したがって、われわれ教師は、道徳教育という場において、大きな教育理念や教育体制に目を奪われるのではなく、むしろ生徒一人ひとりの実存に応答しようとする姿勢を回復し、教師自らの姿勢を通じて、生徒相互の間柄に Ich und Du(我と汝)としての豊かな関係性を築き上げてゆくことこそが、最も優先されるべき課題ではないか、とした。さらに、第3節においては、道徳教育に関するそれまでの考察を踏まえ、高等学校における「総合的な時間」での「道徳授業」を想定して、ブーバーの教育思想に基づく授業試案を展開するとともに、授業づくりのポイントを、筆者の見解として示した。

最後に、ブーバーの教育思想が、今日の時代状況における道徳教育の“中心軸”として、必要不可欠な価値を有しており、道徳授業としての実践化へのプロセスへと高められるべきであると結論づけた。